

雪

雪はロマンチックなイメージがあるが、雪山での遭難事故、山里での雪崩れ災害、雪による交通事故など、悲惨な陰の部分があることも事実である。

昭和三十八年一月二三日。もう四十五年も昔のことであり、あいまいだらけの状態であることを承知の上で以下に続けることにする。

当時、私は高校二年生であった。「大雪警報が出ているので、部活は早めに切り上げて帰宅するように」

放課後、校内放送が流れた。この年の一月は雪また雪の日が多く、当日も間断無く降り続いていった。

普段は放課後六時までの練習時間だが、その日は部活を打ち切り、四時頃には学校を退出していたように思う。

学校から新潟駅までの交通手段は、電車であれば、越後線白山駅（新潟駅の隣りの駅）、バスであれば、学校町三番町の停留場から向かうことになる。その日は、どうやって新潟

駅まで行ったかは、全く記憶に無い。ただ雪がボサボサと降っていたことだけが強く印象に残っている。私は、信越線加茂駅まで帰ろうとしていた。およそ五十分の時間距離である。一緒に居たのが、新潟駅隣りの古津駅まで帰る後輩であった。

新潟駅十七時発の直江津行き普通列車に乗った。順調であれば、六時には家に着くはずだった。だが、列車はいっこうに出発できないでいた。車内アナンスも、いつ出発できるかはわからない、との言葉を繰り返すのみである。

実家に連絡しようにも家に電話はない。どうせ、ラジオでニュースは伝わっているだろうと考え腹をくくった。ただ、いつ出発できるかが分からないため、運転中止になって列車から降ろされたらどうしようか、という不安はあった。後輩と相談して、どこか旅館をあたってみることにした。

新潟駅前に、青少年対象の宿泊研修施設があったように思うが、「青年の家」というのがあり、そこに泊めてもらおうとかけあったがす

でに満杯で断られた。今のようにたくさんのホテルがあったわけではない。やむを得ずまた車内に戻った。

それから車内での状態がどうであったか、後輩と何を話していたかは殆ど記憶に無い。ただ、同じ学校の女子生徒が、半泣きの顔で車内をウロウロしている姿や、特に、炊き出しが、といてもパンだったように思うが、真夜中に配られたことが忘れられない。

列車が新潟駅を発車したのが午前零時頃、七時間遅れである。新津駅までなんとかこぎつけたものの、列車はそこでまたストップした。もう前には進めないのだ。発車の見込みは立たないという。駅構内で夜を明かすが一緒に居た古津の後輩が、自分の家へ行って休もうということ、明るくなつた雪道を二人で歩いた。距離は三キロ以上はあったと思う。

彼の家で所作無くコタツで温もっていたら、午後から列車が動くという情報が伝わってきた。古津駅に向かい、ようやく加茂駅に着いたのが午後二時過ぎだった。

駅から自宅への道路は、これ以上屋根の雪

下ろしも出来ないほど高く積まれ、各家々は電線をまたいで二階から家に入るといふ光景になつてゐる。当時は、今のように除雪機能が発達してゐない。空き地の無い町並みは、道路に投げ捨てるしかなかったのだ。それは、ほとんどんうず高く積まれてしまひ、交通機能は完全にマヒしてゐる。そんな道をたどりながら着いた平屋建ての我が家は、すっぽりと雪に覆われ、雪道から見下ろした玄関だけが暗く穴が開いてゐた。

後に、「三八豪雪」と呼ばれるこの年のこの日の出来事は、私の一生の思い出深い、しかし、二度とは体験したくない真冬のシーンとなつてゐる。一緒に居た後輩とは年にいちどほど顔を合わせる機会があるが、会うたびにこの話が出る。